

オンライン環境における「クラブ活動」

大 橋 真貴子

【要旨】

本報告は、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下、IUC）で Web 会議システムを用いて行われた「クラブ活動」の内容を紹介し¹、実施を担当した教員のコメントと学生へのアンケートの結果を基に、開始時に設定した目的、①楽しみながら日本語が話せる場を作る②学生、教職員が知り合う機会を提供する③後に学生主導でクラブ活動が行えるようヒントを学生に提供する、が達成できたかを検証する。それとともに、学生間のネットワーク構築の可能性を考える。

【キーワード】

クラブ活動、リラックスできる環境、ネットワークの構築、交流の促進

1 はじめに

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、多くの日本語教育機関で Web 会議システム (Zoom) を用いて授業が行われ、すでに実践研究の蓄積が進んでいる。そのようななか、福良 (2021) は、オンライン授業で「学生が授業外でサポートし合えるネットワークの構築」²が困難であることを指摘している³。本報告の焦点は、本年度 IUC で実施した「クラブ活動」の検証と、その活動がオンライン教育環境における学生のネットワーク構築や交流を促進するものになり得るかを考えることである。どのような活動をしていけば、オンライン授業や活動でも学生間・学生と教職員間の交流を促すことができるのか、また、それをどのように授業に結び付けていけるのかを考えるための材料を提供したいと考えている。

2 基本情報

2-1 参加者と回数

本稿における「クラブ活動」とは、日本の中学校や高校にあるクラブのように同じ趣味や興味を持つ学生が集まって行う活動である。授業と意図的に関連付けない内容と活動であり、IUC の学生のみが参加し、教職員が活動の担当者となる。筆者は「クラブ活動」の統括担当者となり、企画運営の中心となった。

「クラブ活動」は毎週水曜日の 4 限目 (10 時 30 分~11 時 50 分) に、1 学期 6 回、2 学

期6回(うち1回は各「クラブ活動」の説明会)行われた。20-21年度、学生56名、教職員11名が参加した。学生には参加を義務化したこともあり、1回の欠席者は平均5名程度であった。

2-2 開始時に設定した活動目的

学生と教職員に伝えた活動の目的は、以下の通りである。

- ① 楽しみながら日本語が話せる場を作る
- ② 学生、教職員が知り合う機会を提供する
- ③ 3学期以降に学生が主導して「クラブ活動」を行うことを期待しているので、そのヒントを学生に提供する

本報告の最後に、学生からの学期末・年度末アンケートにおけるコメントを基に、この目的が達成できたか否かを検証する。

2-3 開始までの準備

水曜日に出講する教員(常勤6名、非常勤1名)にクラブのアイディアを募集し、その担当となるよう依頼した。それにより、①料理クラブ、②短歌クラブ、③ドラマクラブ、④日本の歌愛好会、⑤ビデオレビュークラブ、⑥ヨガ・ストレッチクラブ、⑦盆踊り・ソーラン節クラブの7つのクラブが行われることとなった。(以下、各クラブを担当する教員を「顧問」と称す)

各クラブのお知らせや資料の配布には、Google Classroom(グーグル・クラスルーム)を使うこととした。クラスルームの「ストリーム」で全体的な連絡事項を、「授業」で各クラブの連絡事項を、それぞれ記載した。

2-4 活動の概要

1、2学期ともに提供するクラブは変わらなかったが、学生の参加方法を変えた。1学期は学生が毎週異なるクラブに登録・出席できるようにし(以下、選択式と呼ぶ)、2学期は同じクラブに参加する(以下、固定式と呼ぶ)こととした。本章では各学期の「クラブ活動」の進め方を説明する。

2-4-1 1学期

1学期に選択式としたのは、「クラブ活動」を通して、なるべく一人の学生が知り合う学生の数を増やしたいという希望や、教師側が企画した「クラブ活動」内容がヒントとなり、後に学生側からクラブのアイディアが示され、「学生主体のクラブ活動」が行われるようになってほしいという期待があったからである。具体的な進め方としては、顧問は1回で完結する活動を3つ企画して、2回続けて同じ活動を行い、学生は毎回出席するクラ

ブを選び、登録する。例えば、1週目に料理クラブに参加したとすると、2週目の活動内容は1週目と同じであることから、2週目はドラマクラブを選ぶことができる。もちろん料理クラブに2週続けて登録することもできる。これにより、学生は一つのクラブに集中して参加するか、または、多い場合は6つのクラブを体験できることになる。この方法により、担当授業以外に毎週異なる6回分の活動を企画・実施することが避けられ、顧問の負担が軽減できると考えられた。

クラブの登録から活動までの1週間の流れは以下の通りである。

- ① 1週目の「クラブ活動」後（水曜日）：各顧問は、グーグル・クラスルームに「課題」として、2週目の活動内容を書いてアップする。
- ② 希望届締め切り（土曜日）：学生は活動内容を読み、参加したいクラブの「課題」の「提出」ボタンを押す。これによって参加予定のクラブに登録したこととなる。
- ③ 2週目の「クラブ活動」（水曜日）：学生は自分が登録したクラブに参加する。欠席せざるを得ない学生は事前に顧問にメールで連絡をすること、また、無断欠席をした学生も後日顧問に事情説明のメールをすることが必須とされた。これは2学期も同じである。

2-4-2 2学期

1学期を選択式にしたことにより、学生からも教職員からも、お互いに知り合う機会が増えたという感想が聞かれた。一方で、顧問となった教員から、選択式にしたとしても必ずしも1週目と2週目で同じことができるわけではない、2週目の顔ぶれによって活動内容を変える必要が出てくる、参加者が固定されていたほうが準備がしやすい、との意見が出た。つまり、選択式にしたほうが顧問は3回分しか準備をする必要がないので負担軽減になると統括担当者は当初考えたが、実際は毎回準備をすることになって負担軽減にはなかったのである。そこで、2学期は原則1度登録をしたクラブに最後まで参加する、固定式を取ることとした。

2学期の1週目に各顧問が全学生に対してクラブの合同内容説明を行い、それを参考に学生は自分が1学期間参加するクラブを1つ選んで登録した。活動は1学期と同じ水曜日の4限で、全5回行った。

2-5 各クラブの活動内容

本節では各クラブの活動内容を簡単に紹介する。（クラブ名の五十音順）

① 音楽愛好会

1学期は顧問が選んだ音楽についての解説を聞いたり、歌ったりして鑑賞した。2学期は1回の授業で1～2人が自分の好きな音楽を紹介したり、得意な楽器を演奏したりして、音楽を多面的に楽しんだ。

② 短歌クラブ

1 学期は講師が紹介した短歌について参加者が自分の解釈を述べ、2 学期は各学生が好きな短歌を紹介するなどして、短歌に対する知識を深めていった。必要に応じて顧問は文法解説を行った。また、両学期とも自分で短歌を作り、お互いに鑑賞する時間を設けた。

③ ドラマクラブ

話題になった連続ドラマを観て、内容を確認したり感想を述べあったりした。また、登場人物が用いた表現や、ドラマの背景にある考え方や問題点などを顧問が解説し、日本語や社会に対する理解を深めた。

④ ビデオゲームクラブ

1 学期は、人気があるゲームやゲーム業界のニュースについて意見交換が中心となったが、2 学期は Discord という電話通話サービスを使って顧問と参加者がオンラインマルチプレイヤーゲームを楽しんだ。

⑤ 盆踊り・ソーラン節クラブ

1 学期は「炭坑節」や「ソーラン節」などを取り上げ、顧問が成り立ちや歌詞の意味、動きなどを解説した後、一緒に踊って祭りの雰囲気味わった。(2 学期は実施せず)

⑥ 料理クラブ

1 学期は「忙しい私の料理」や「私の和食」といったテーマについて学生が話す活動が中心であった。2 学期は、料理を扱っている番組やドラマを用いて、よく使われる表現や語彙などを確認したり、意見交換を行ったりした。

⑦ ヨガ・ストレッチクラブ

1 学期は、軽いヨガやストレッチから始め、ブレイクアウトルームで運動や健康に関連する話題について話し合った後、全員で 25 分のヨガを行った。2 学期は参加者お勧めの運動を全員が試す時間を設けた。

3 検討

1、2 学期末と年度末(4 学期末) 4 の 3 回、全学生を対象として「クラブ活動」に対するアンケートを行った。その結果をもとに「クラブ活動」を検証する⁵⁾。

3-1 1 学期末アンケート

1 学期末に全学生対象のアンケートを行った。質問は「どのクラブに参加したか」と、「今学期一番多く参加したクラブを一つ選び、そのクラブに対して何か提案がありましたら書いてください。(例えば、〇〇を取り上げてほしい、〇〇について私が説明したい、等)」の 2 問であった。後者は、2 学期の「クラブ活動」の参考にしたいから聞いてほしいという顧問の要望を受けて考えたものである。

アンケートに対して 56 人中 49 人が回答し、うち 33 名がコメントを書いた。ほとんど

の学生が満足していた⁶。提案・要望としては「料理クラブ」に対しては、「郷土料理について話し合いたい」「料理の腕を磨くために必要なことを教えてほしい」、「音楽愛好会」に対しては「自分達で曲を選びたい」、「ヨガクラブ」に対しては「自分の運動法やストレッチ解消法について話す時間が増えたら、日本語の勉強・練習にさらに役立つと思う」、「盆踊りクラブ」に対しては「踊りの歴史が知りたい」、「短歌クラブ」では、多くの新しいことが学べたという意見が多く、一方で短歌を詠んでみたいという積極的な学生もいた。「ドラマクラブ」に関しては、扱うドラマを学生が事前にみるべきかどうかについての希望が書かれていた。各クラブの顧問は意見を取り入れるなどして 2 学期の「クラブ活動」に臨んだ。

3-2 2 学期末アンケート

2 学期末にも全員にアンケートを行い、56 人中 27 人から回答を得た。質問と回答は以下の通りである。

① 参加したクラブと、その感想を教えてください。

回答者が参加したクラブの割合は、「料理クラブ」、「ヨガ・ストレッチクラブ」、「短歌クラブ」がそれぞれ 11.1%、「音楽愛好会」が 14.8%、「ドラマクラブ」と「ビデオゲームクラブ」がそれぞれ 25.9%、であった。

多くのコメントが好意的で、「楽しかった」「リラックスできた」という言葉がよく見られた。ただ、細かく学生のコメントをみると、「クラブ活動」を日本語の勉強の一環としてみている学生と、交流を深める機会ととらえている学生がいることが分かる。前者は、例えば「授業ですぐ疲れてしまう傾向があるので、クラブで別の勉強の方法で勉強できるのでいいと思う」「真面目に勉強する以外に、楽しく勉強することも必要だと思う」「クラブ活動であまり専門的に話さなくてもいいという雰囲気がよかったと思う。友達と楽しく日本語を習うことができいいと思う」「オンライン授業で雑談の時間はやや少ないので、クラブ活動を通じて会話能力を向上できると思う」というようなコメントである。

一方、「クラブ活動」を学生間の交流を深めるものとしてとらえていた学生は「今年、日本にいない学生が多いので、クラブ活動がなければ、クラス以外の、普段会えない学生と知り合う機会は少なくなったと思う」「日本語で他人と関係を作ること大事だという気持ちになった」「お互いに話して仲良くなる機会なので、あったほうがいいと思う」と書いている。

② 1 学期は選択式（毎週違うクラブに参加できること）、2 学期は固定式（同じクラブに参加すること）でしたが、いかがでしたか。

この質問に対する回答も概ね好意的で、「1 学期に様々なクラブを試してみて、2 学期に好きなクラスを選ぶことができて良かった」「1 学期でクラブめぐりができて楽しかった

ですが、2 学期でもっと他の生徒と仲良くできて関係を作るのも貴重だったと思う」などの理由を挙げている。どちらかという選択式の方法に好意的だった学生は、「選択だったらもっと気楽に別のクラブに参加できる」「様々な活動に参加できるほうが好きで、2 学期は違うクラブに行きたかったら、前もって先生に連絡しないといけないことが面倒だった」と書いている。一方、固定式に賛成の学生は「選択クラブではメンバーがいつも違うのであまり仲良くなれなかったが、固定クラブでは仲良くなれたので後者がよかった」と人間関係の構築ができたことを固定クラブの長所として挙げている。

また、2 学期の最初に行った「クラブ合同説明会」について尋ねたところ、「クラブ活動の内容や雰囲気詳しく分かったので非常に良かった」という意見が多数を占めており、1 学期にも説明会をしてほしかったと書いた学生もいた。

③ クラブの進め方はどうでしたか。

顧問が中心となって「クラブ活動」を進めたことに対しては「先生が準備をした方が、コンテンツが面白いと思う」「先生から多くのことが学べてよかった」という意見がある一方で、「顧問の先生が話し過ぎた」という意見もあった。また、「『学生が営むクラブ』は『先生が指導する易しい授業』ということになった。それは仕方がないことなので、もし来年度もクラブ活動をするようであれば、1 学期から顧問中心のほんの少しだけ高度な文学鑑賞のクラブがあるといいと思います」と、顧問中心だからこそできる「クラブ活動」を提案する学生もいた。

④ クラブのアイデアを出してください。

この質問に対して、以下のような記載があった。

- ・ 方言や日本の若者の新語・流行語について話し合うクラブ
- ・ 聖地巡礼（アニメに描かれた地域をオンラインで旅行する）クラブ
- ・ 映画&写真クラブ
- ・ 美術クラブ
- ・ 将棋部

なお、3 学期以降は、選択 C₇の授業が水曜日の 4 限に行われることになったため、「クラブ活動」は必修ではなくなった。ただ、このアンケートの最後に、学生自らが主体となって「クラブ活動」を行いたい場合は、担当者に連絡するよう記載し、自主運営クラブの活動を促した。その結果、学生や顧問の有志が主体となり「音楽愛好会」「ドラマクラブ」が活動を継続し、「沖縄研究会」という新たなクラブが活動を開始した⁸。

3-3 年度末アンケート

56 人中 51 人から回答があり、「クラブ活動はどうでしたか」という質問に対して Excellent が 45.1%、Good が 39.2%、Fair が 15.7%であった。2 学期末アンケートと同様のコメント以外に、「クラブ活動によってベスト・フレンドができた」「3 学期以降も続けてほしかった」という肯定的なものから「授業で疲れているので、その時間休みたかった」「自主勉強の時間にしたかった」「自分がやりたいクラブがなかった」という否定的なものまで、幅広いコメントがあった。また、「クラブ活動」の運営に関して、「事前に学生の希望を聞き、それに基づいたクラブ活動をしてほしい」「クラブ活動とは別の時間に、自主的に趣味等に基づいたクラブを学生が作り、『寺子屋』⁹を活用して活動を行うよう積極的に呼びかけた方がいいと思う」という助言もあった。

3-4 顧問の意見

顧問に個別に意見を聞いたところ、「自分の興味があることをして楽しかった」「自分自身もリラックスできてよかった」というコメントがある一方で、「実は負担だった」というコメントもあった。後者の理由は、対面授業では授業を行わない水曜日の 4 限に時間的拘束があったためと思われる。この時間の使い方については、他の顧問から、「クラブ活動」ではなく、担当授業のフィードバックの時間に当てたかったという意見もあった。

事前準備について、時間をとった顧問もいたが、「準備の必要はあったが、興味があることなので負担ではなかった」という意見と、録画などの準備と、それが思った通りに活用できるかどうか緊張感を覚えたという意見もあった。

個別に話して感じたのは、どこまで準備をしたらいいのか、また、どのように活動を進めたらいいのか、という戸惑いを持ちながら顧問は活動を進めていたということであった。これは、「クラブ活動」の目的が不明瞭、また、統括担当者が正確に伝えていなかったためと言わざるを得ない。

3-5 目的の検証

IUC で 1、2 学期を通して行われた「クラブ活動」の概要を紹介した。上述したように、その目的は、①楽しみながら日本語が話せる場を作る、②学生、教職員が知り合う機会を提供する、③学生主導でクラブ活動を行うことを期待し、そのヒントときっかけを学生に提供する、の 3 つであった。最後にこの目的が達成できたかどうかを検証する。

コロナ禍のなかで、ヘッドセットをして画面を凝視する日々が続くにもかかわらず、「クラブ活動」の時間は「リラックスができた」「楽しかった」「IUC のなかで好きだった時間の一つ」というコメントが 3 回のアンケートで必ず見られたことから、①はほぼ達成できたと言えるだろう。また、②に関しても 3-2 で書いたように「友達ができた」というコメントもあり、どのアンケートでも顧問への感謝の言葉が数多くあったことから達成で

きたと言える。これは、顧問が初めてのことににもかかわらず、責任感をもって準備して学生と接したからに他ならない。ただ、「クラブ活動」を勉強の一環と考えるか、リラックスする時間と考えるかは、顧問・学生によって認識に違いがあり、そのために活動参加に対する姿勢や、顧問のとまどいなどが生じてしまったことは否めない。これは統括担当者が明確に説明し、態度を示すことによって避けられただろう。③に関しては、「音楽愛好会」が、学生の熱意や顧問の指導のもとに3、4学期と活動を続けて「ミニ文化祭」¹⁰へと発展し、「ドラマクラブ」もテレビドラマやLINEドラマを見て、自分達で語彙や表現を増やした点を考えると、達成できたと言えるかもしれない。

一方で、学期末アンケートなどをみると、そのような活動をしたくても「仲間が集められなかった」「いいアイデアが浮かばなかった」というコメントが見られた。統括担当者としては、相談の機会を提供していたのだから連絡をくれれば助言もできたのに、という残念な気持ちがあるが、同時に、非対面型オンラインにおける学生間のネットワークづくりの難しさを実感した。

IUCでは対面授業の際、学生達が自主的に「会話練習のグループ」や「古典文法勉強会」を作り、運営することがあった。それは、活動の中心となるリーダー的な学生がいたことも大きいですが、授業だけではなく休み時間や放課後、休日に一緒に過ごすことができる環境があったからであろう。例えば、放課後、図書室やコンピュータールームで、一人一人異なる教材に取り組んではいながらも学ぶ空間を共有し、帰り道は母語で自分の専門や将来を話しあったりできた。一方、非対面オンラインの体制ではそのような環境が限定され、勉強会や趣味のグループを学生が自主的に作って運営することはハードルが高かったと思われる。3-3で学生が提案しているように、趣味等に基づいたクラブを学生が自主的に作って活動を行うよう積極的に呼びかける必要性があったと言える。

今年度末に「オンライン環境下では無理だと思っていたが、よい仲間ができて自分でも驚いている」と言った学生は、コミュニケーション力や性格もあると思うが、仲良くなったきっかけとして、同じ授業をとり、何回も顔を合わせたことを挙げている。人間関係の構築は、オンラインかどうかを問わず、ある程度の時間と機会が不可欠である。特にオンライン授業しか行えない環境下では、それを教師側が意図的に提供しなければならないと考える¹¹。

4 まとめ

コロナ禍で移動の禁止や外出の自粛、フィジカル・ディスタンス保持要請などによって、また、オンラインという授業形態によって、我々は従来とは異なった方法で人間関係やネットワーキング構築をしていかなければならなくなった。以前は当然であったことが、努力して構築する必要性が生じたのである。IUCでは20-21年度は「クラブ活動」という方法を取り、教職員の努力と熱意、学生の柔軟性によって一応の成果を得られた。先

行きは見えないが、人間関係やネットワークの構築を望む気持ちは普遍であり、それをかなえるために新たな視点から方法を模索する必要があるだろう。

やや議論が拡散してしまったが、20-21 年度オンライン環境での「クラブ活動」の検証から、もし日本語教育機関でこのような活動を行うのであれば、事前に学生の意見やアイディアを聞き、①リラックス目的のクラブと②勉強目的のクラブを設置すると、その効果が高まると考えられる。また、授業やこうした活動とは別に、共通の趣味や専門を持つ仲間を探すための機会を頻繁に設けることが必要である。それがきっかけとなって、学習グループや専門に関する勉強会が学生の中から生まれてくる可能性も高まるのではないだろうか。

注

- 1 プログラム全体における「クラブ活動」の位置付けについては秋澤 (2021) を参照のこと。
- 2 福良 (2021)
- 3 ネットワーク構築がうまくいかず、さらには孤立感を学生が覚えることは、非対面型オンライン授業の短所の一つと言えよう。例えば、九州大学は留学生を含めた学生へのプレコロナ (2019 年) とポストコロナ (2020 年) の学校生活や精神面での調査を比較し、ポストコロナでは「学生 (留学生含む) と教職員のコミュニケーションが減少している」「孤独感や孤立感を感じる学生が増加しているのではないかと」考察している (九州大学「令和 2 年春学期学生生活およびオンライン授業に関する学生アンケート結果報告書 (学生生活パート) 令和 2 年 8 月作成」https://www.chc.kyushu-u.ac.jp/~webpage/publication/img/R2_student_questionnaire_result_report.pdf (2021 年 6 月 30 日閲覧))。IUC においても今年度の学生に対して卒業時に行ったアンケートで「予想したより孤独だった」「同じ興味や専門を持つ学生とのネットワーキングの機会が奪われた」と、これまでのアンケートでは無かったコメントが見られた。
- 4 IUC のレギュラーコースは 4 学期に分かれている。秋澤 (2021) 参照。
- 5 学生のコメントは英語と日本語で書かれたものがあり、英語で書かれたものは筆者が日本語に訳し、日本語で書かれたものはほぼ原文通り載せているが、日本語の誤りは直し、文末も「だ・である」の形に変えている。
- 6 ただ、個別に学生と話した際に、話す力がまだ弱い学生は、よく話せる学生とブレイクアウトルーム (Zoom の機能の一つでミーティングを複数のルームに分割できる) で 2 人きりになった時、会話が续かず「とても相手に悪いことをした。その時間はリラックスできなかった」と語っていた。語学力の差の問題 (話す力がある学生の話す時間

- が長くなる等) はどのクラブでも見られた。
- 7 「選択 C」とは、3、4 学期に行われる選択科目で「文語文法」「漢文」「ビジネス」の 3 コースがある。詳細は、秋澤 (2021)。
 - 8 Zoom の利用時間上、有料会員である教員がスケジューリングする必要があったため、学生が主体となって活動を行っていても、各クラブには顧問が必要であった。
 - 9 秋澤 (2021) 参照。
 - 10 秋澤 (2021) 参照。
 - 11 企業研修や教育現場で使われているアイスブレイク手法が参加者の共通点を探す方法の一つとして考えられる (増田将伸 鈴木陵 清水菜未 (2021)「必修英語科目におけるアイスブレイクの探索：継続的な教職連携による考察」『高等教育フォーラム』第 11 号 pp.43-52)。

参考文献

- 秋澤委太郎 (2021)「2020-21 年度レギュラーコースカリキュラム報告—アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの集中日本語教育—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第 10 号 pp.48-68
<https://iucjapan.org/pdf/nenpou2021_Akizawa.pdf>
- 酒井佳世 (2020)「ハイブリッド型授業における ICT を活用した教育プログラムの検討」『久留米大学コンピュータジャーナル』第 35 巻 pp.22-29
- 福良直子 (2021)「同期型・非同期型併用による上級日本語教育の実践—学部留学生を対象とした「総合日本語」の授業の振り返りから—」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』第 25 号 pp.47-54